

竹内好訳

魯迅文集

第五卷

筑摩書房

魯迅文集第五卷

一九七八年一月三〇日初版第一刷発行

訳者 竹内 好
発行者 岡山 猛

発行所 筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二―八郵便番号一〇―一九一
電話〇三―二九一―七六五一 振替口座東京六一四二二三

印刷・精興社 製本・牧製本

1397-7803-4604

魯迅文集第五卷

目次

評論 一九三二年四月—一九三五年十二月

暗い中国の文芸界の現状

上海文芸の一瞥

「民族主義文学」の任務と運命

『野草』英訳本の序

「友好国びっくり仰天」について

『中学生』雑誌社の問いに答えて

北斗雑誌社からの質問に答える

「意に介せず」

『三閑集』序言

魯迅著訳書目録

『二心集』序言

「第三種人」について

74 69 58 52 50 48 47 44 42 28 9 3

罵倒と威嚇は戦闘ではない

『自選集』自序

「難に立ち向う」と「難を逃げる」について

どうして私は小説を書くようになったか

SHAWとSHAWを見に来た人々を見る記

同志小林の死を聞いて

忘却のための記念

経 験

諺

私の種痘

小品文の危機

上海雑感

火・王道・監獄 ——二三の支那の事について——

『偽自由書』抄

聞いた見物	157	逃走の弁護	158	事実尊重	160
航空救国の希望三つ	162	二種類の分かりにくさ	164		
〔このため誘発された分かる論〕	166	〔分かる論へ一矢〕	169	戦略的配慮	171
		文学上の値引き	173		
中国人の生命圏	175	文章と主題	177	徳治	179
天と地と	181	判断留保	183	ふたたび判断留保について	185
		「有名無実」の反駁	187	甚解を求めず	189

『偽自由書』前記および後記

『偽自由書』前記	192	『偽自由書』後記	196
----------	-----	----------	-----

『准風月談』抄

夜の頰	239	押し	241	偶成	243	「白相で食う」
245 「墮民」私見	246	重三感旧	249	「感旧」以後（上）	251	「感旧」以後（下）
		256		相手不在	259	
「あわせて」に答えて	271					

『准風月談』前記および後記

『准風月談』前記 278 『准風月談』 281

『花辺文学』抄

批評家の批評家 318 漫罵 320 旧正月 321 秦

理斎夫人のこと 323 「……」 「□□□□」 論の補 325

玩具 327 「徹底」の底 329 蟬の世界 331 損

得勘定 333 水の性 335 読書ノート 337 読書

ノート (二) 339

〔参考〕『花辺文学』序言

第五卷訳註についてのおことわり

訳註

評

論

一九三一年四月—一九三五年十二月

暗い中国の文芸界の現状

——アメリカの『ニュー・マセズ』誌のために——

今日の中国では、無産階級の革命的文芸運動が唯一の文芸運動である。まだ荒野に芽生えたばかりであるが、それ以外には、中国には一つも文芸がなくなってしまうからだ。支配階級に属するいわゆる「文芸家」たちは、とうに腐敗しつくして、いわゆる「芸術のための芸術」も「デカダン」の作品も生み出せなくなっている。いま左翼文芸を閉め出す手段は、中傷と圧迫と逮捕と殺人だけである。左翼作家に対抗するものは、無頼漢とスパイと番犬と殺し屋だけである。

このことは、ここ二年間の事実によって十分証明できる。

一昨年、ブレハーノフとルナチャルスキイの文芸理論がはじめて中国に紹介されたとき、まっ先にバビット教授の弟子で感覚鋭敏な「学者」が憤慨した。そもそも文芸は無産階級のものではない、もし無産者が文芸の創作または鑑賞を望むなら、まず一生懸命金をためて、有産階級にしあがるべきであって、ボロを着たままぞろぞろこの花園にはいり込んで騒ぎ立てるべきではない、というのだ。おまけに、中国で無産階級文学を主張する連中は、ソ連からルールをもらっ

ているというデマまで飛ばした。この手口はまったく効果がなかったわけではない。上海の新聞記者たちはさかんに怪情報をでっちあげ、ときにはルーブルの金額さえも紙面にのせた。だが、心ある読者は信用しなかった。こんなニュースよりも、もっと確かな事実、すなわち無産者を殺戮するための銃砲が帝国主義国家から送り込まれる事実を見ているからである。

支配階級の官僚は、学者にくらべて気のつき方がおそかったが、それでも去年に入ると、次第に圧迫を強めた。雑誌も書籍も、禁止処分になった。内容に多少とも革命色あるものはもちろん、表紙に赤い字があるとか、作者がロシア人であるだけの理由で処分の対象にされた。セラフィモウィッチ、イワーノフ、オグニョフは言わずもがな、チェホフやアンドレエフのいくつかの小説さえが禁止である。これでは本屋がたまらないから、せいぜい算術の教科書か童話の本を出すしかない。ミスター・キャットとミス・ローズがお話しました、春はなんてすばらしいんでしょ、といった調子である——⁽³⁾というのは、ツール・ミュレン⁽³⁾作の童話の訳本までが禁止されたので、春のすばらしさでも賛美するしか手がないわけである。ところが今度は、ある將軍がおこり出した。動物が口をきくとは何事か、おまけにミスターあつかいは、人類の尊厳を犯すというわけだ。

だが禁止だけでは、根本対策とはいえない。そこで今年は、五人の左翼作家が行方不明になった。家族が探しまわって、警備司令部にすることがわかったが、面会はできぬという。半月たってからまた様子を見にいったら、もう「解放」された——これは「死刑」のふざけたよび方であ

る——という。しかも上海の新聞には、漢字紙と外字紙とをふくめて、一行も記事がのらなかった。つづいて、現代物の出版社や販売店の閉鎖がおこって、多いときは一日に五軒に及んだ——もっとも、ちかごろまた続々店を開いている。どういふ事情なのか、さっぱりわからないが、ただ本屋の広告を見たかぎりでは、スチブンスンとかワイルド⁽⁵⁾といった人のものを英漢対訳でさかんに出版しているらしい。

もっとも、支配階級は文芸に関して、積極的な建設が何もないわけではない。かれらは一方では、いくつかの本屋から元の主人や店員を追い出して、こっそり自分たちの言うままになる一味のものを送り込んだ。だがこれは、たちまち失敗した。なぜなら、店内がイヌばかりだと、その本屋はいかめしいお役所そっくりになる。ところが中国のお役所ときたら、人民がいちばん恐れ、いちばんいやがる場所だから、当然、だれも寄りつかない。寄りつくのは、ひまで困っているイヌ仲間だけである。したがって、こんなことでは商売繁昌どころではないからだ。そこで他方、文章を書き、雑誌を出して、禁止された左翼刊行物にとって代る試みがなされて、すでに十種類ほどが出た。しかしこれも失敗した。失敗のいちばん大きな理由は、こうした「文芸」の育ての親が、一人は上海市の政府委員、一人は警備司令部の捜査隊長だったことだ。⁽⁶⁾どちらも「創作」よりは「解放」の腕ききとしての名声のほうが高い。もしかれらが「殺人法」または「探偵術」といった本を出すなら、あるいは読者がつかめたかもしれないが、不幸にも絵をかき、詩をつくらうとしたのだ。ちょうどアメリカのヘンリー・フォード氏が、自動車談義をやめて、歌手に転

向するやうなもので、誰だつて狐につままれた気がするだけである。

官僚の本屋には人が寄りつかないし、雑誌は読者がさっぱり、ということになれば、その救済策は、すでに著名ではあるがまだはつきり左傾はしていない作家をつかまえて、自分たちの雑誌の売れゆきを助けるために、強制して書かせることである。結果は、一人か二人頭のよくないのが網にかかっただけで、多くのものはまだ書いていない。おつたまげて、行方をくらましてしまったものも一人いる。

いま、かれらの間で大事がらわれている文芸家は、かつて左翼文芸運動の開始当初、まだ迫害もなく、革命的青年によって支えられていたところに自称左翼であつて、いまではかれらの指揮刀の下にもぐり込み、うしろ向きに左翼作家に敵対している少数の連中⁽⁷⁾である。なぜ大事がられるかといえば、以前左翼であつたために、その刊行物のいくつかは、表紙がまだ一部赤いからだ。もっとも、労働者農民の図柄は、どれもこれも病人さながらのピアズレー⁽⁸⁾の絵に代えられてしまつた。

こうした状態の下に、これまで旧式のギャング小説や新式のエロ小説を愛読してきた読者たちは、べつに不便を感じていない。しかし、もっと進歩的な青年は、読みたい本が手に入らぬことを感じている。やむを得ず、むだ話ばかりで内容のない本——そうでないものは禁止処分を受ける——によって渴きを一時いやす。かれらは、官営の吐き気を催す毒薬を買うよりは、空っぽのコップを傾けるほうが、少くとも害にならぬことを知っているからだ。しかし、大多数の革命的

青年は、何がどうあろうと、きわめて熱烈に左翼文芸を要求し、擁護し、発展させる態度を変えていない。

したがって、官営およびイヌ営の刊行物を除くと、そのほかの本屋が出している雑誌では、なんとか急進的な作品を少しでものせたいと苦心している。空っぽのコップだけを売っていたのはこの商売は成り立たないことを、かれらも知っているからだ。左翼文芸は革命的読者大衆の支持を受けており、「未来」はこちら側にある。

こうして、左翼文芸は成長をつづけている。むろん、石にひしがれた若芽のように、まがりくねった成長ではあるが。

残念なのは、左翼作家のなかに、まだ労働者農民から出た作家がいないことだ。ひとつの理由は、これまで圧迫と搾取の連続で、教育を受けるチャンスが皆無だったこと、もうひとつの理由は、中国の象形文字——いまではほとんど象形でなくなっているが——の字体が複雑なために、たとい労働者農民が十年勉強しても、自分の意見が自由に発表できるようにはならないことだ。このことが刀持ちの「文芸家」を喜ばせる。かれらの考えでは、教育を受けて文章が書けるような人間は、最低プチブル階級であることはまちがいない。プチブルなら自分の小さな財産にしがみつかずだ。それがいま無産者のほうに傾いているのは断じて「ニセモノ」である。無産階級文芸に反対するプチブル階級の作家だけが「ホンモノ」である。「ニセモノ」よりは「ホンモノ」のほうがよい。したがって、左翼作家に対するかれらの中傷、圧迫、逮捕、殺人こそ、よりよい

文芸である、というのだ。

しかし、この刀による「よりよい文芸」こそ、実際には、左翼作家たちが、同様に圧迫され、殺される無産者と同じの運命を担っており、左翼文芸こそいま無産者とともに受難(Passion)の時期にあり、したがって将来、当然に無産者とともに立ちあがることを証明するものである。ただ人を殺すだけ、これは何としても文芸ではない。かれらはそれによって、自分に何ひとつないことを自分に向けて宣告しているだけだ。

上海文芸の一瞥

——一九三二年七月二十日、社会科学研究会での講演——

上海の古い文芸は、起源が『申報』⁽¹⁾にありました。『申報』のお話をするとなると、六十年前まで遡らなければなりません、そのころのことは私は知りません。私の覚えておりますのは、三十年前のことです、当時の『申報』はまだ国産の竹紙^{ちくし}に片面だけ印刷したものでした。その新聞に寄稿していた顔ぶれは、よその土地から流れてきた「才子」が多かったのです。

そのころの知識人は、だいたい二種類ありました。君子と才子とであります。君子は、四書五経を読んで八股文^{はつこぶん}の練習をするだけの、型にはまった人間であります、才子となると、そのほかに『紅樓夢』のような小説を読んだり、国家試験には用のない古今体の詩を作ったりしたものです。つまり才子は、大びらに『紅樓夢』を読んだわけです。もっとも君子も、こっそり『紅樓夢』を読んでいたかどうか、それは私にはわかりません。上海に租界——そのころは租界のことを「洋場」^{ヤンチャン}とか「夷場」^{イチャン}とか申しました。のちには夷という字が物議をかもすというので、代りに「舞場」^{イチャン}と書いたりしました——ができる、才子たちのなかには、さっそく上海へやってくる